

すでに「第五報」でペンテコステまでの説教原稿をお届けしています。今回はそれに、差し入れる形で、以下のこどもと大人の説教を加えていただければと思います。前者は創世記2～3章、後者はローマの信徒への手紙8章18節以下からの説教です。教派の「日曜学校日」を覚えながら、私たちの教会としては初めて、こどものせっきょうの動画を作成し公開します。インターネットをご利用の方は、日本キリスト教会府中中河原教会ホームページをご確認ください。 <https://www.fuchu-nakagawara-church.com/>

こどもの説教「うたおうアダム、エデンのひがしで」

世界でさいしょの人間

みなさんは、世界でさいしょの人間の名まえを知っていますか？ 聖書によれば、それはアダムとエヴァですね。聖書のさいしょの本、^{そうせいき}創世記にそう書いてあります。それによると、ふたりはかみさまに^に似ていたそうです。どんなかおだったのでしょうか？いや、それは顔が似ていたという^{いみ}意味ではありませんでした。かみさまに似て、すべての世界を^{あい}愛することができたということです。かみさまが人間を愛してくださったように、アダムとエヴァはかみさまを愛し、あかちゃんがお父さん・お母さんをよぶようにしたしく、よびました。またアダムはエヴァを、エヴァはアダムを、同じように愛しました。そして、かみさまが世界を大事にしておられるように、アダムとエヴァも、世界を大事にすることができたのです。この大地も、海も、空も、すばらしい。人間だけではなくて、空をとぶ鳥も、海をおよぐ魚も、地に生きるどんな生きものも、木や花ばなも、みんながいっしょに生きています。^{しんせん}新鮮な水はあふれ、おいしい木の^み実がゆたかになりますから、動物をころして^{ひつよう}食べる必要もありません。聖書はその^{ばしょ}場所を、「エデンの^{その}園」（とってもこちよくて楽しいお庭）とよびました。

土くれアダムの赤い色

^{じつ}実をいうとね、もともと、アダムだって、この大地の土のちりからつくられたのです。土は聖書のことばで、アダマといいます。かみさまは、ねん土をこねるようにアダマをこねてアダムをつくった、と創世記の二番目の章に書いてあります。

では、問題。^{ざいりょう}人間の材料となったその土は、何色だったでしょう。……正解は……赤！あるいは、赤茶色のようなかんじかな。かみさまは、赤い土から人間をおつくりになると、^{はな}鼻にいのちの息をふきかけられました。鼻からですよ、ふーっとね。いつだったか、「バラ

バラ言葉と霊のほのお」(バベルのとうとペンテコステ)のお話にでてきた神さまの風のおぼえておほえているかな? 神様がふーっと息を吹きかけると、人は心の底から熱い思いで、おはなししたり、いのったり、うたったりして、本当に人間らしくひとつになれるのでしたね。かみさまがそんなふう^{いのち}に命の風をおくってくださったので、かみさまの力がアダムの鼻からのどをとおってむねをみたくします。命のちからを血がドクドクとながれて体ぜんたいにはこぶことで、人はいきることができるのです。アダムの赤い色、それはアダムのダムのいろ。あ、ダムというのは血のことです。赤は血の色、炎のようにからだ全体をめぐる、命の色でもありました。みんなの中にも、同じ色の血が流れていますよね。最初の人間アダムも、そしてわたしたちも、そんなふうにかみさまの霊のほのおに生かされている間は、神さまと世界とを愛することができる心ももっているはずですよ。



「はだかのエヴァとはだかのアダム」おおいしふみこ (4さい) 2020/5/3

エヴァはアダムの「骨の骨」

さて、アダムが眠っている間に、かみさまがアダムの胸の骨の一部をとって、その骨にアダムと同じようにこねた粘土をつけてかたちをつくり、やっぱりおなじように鼻からふーっと息をふきいれて命をあたえられたのが、さいしょの女の人、エヴァでした。からだ

のまんなか、ろっ骨から取ったといいますが、聖書の言葉づかいでは、それは一番大事な骨という意味なのだとおもいます。^{たてもの}建物をささえるいちばんだいじな^{はしら}柱を^{やたいぼね}屋台骨といたりしますが、それとおなじといえるかな。エヴァはアダムの命にとってかけがえのない、いちばんだいじな人なのです。「エヴァ」とはあとで名づけられた名前ですが、「命」という意味をもっています。心あつく、^い生き活きとしていてすてきな女性だったのでしょね。やっぱり心に神さまの熱い霊の炎の風を受けていますから、彼女は心から熱い思いでアダムを愛し、かみさまを愛して、世界を大事に考えることができたことでしょう。その後、子どもが生まれるなら、母としてあかちゃんを心から愛して^{そだ}育てることもできるはずです。

はだかでうまれて、はだかでしんで

ところでそのころ、人は、^{はだか}裸で生活をしていました。みんなも、みんなのそばにいるあ^{おとな}の大人も、おじいちゃんやおばあちゃんだって、だれでもそう。さいしょはだれも、はだかがはずかしくはありませんでした。人は裸でうまれて、ありのままですばらしかったのです。すばらしかったのは生まれたての体だけではありません。彼らは体^{ふく}に^き服を着ないで裸だっただけでなく、心もまた裸のようで、かみさまに^{かく}隠しごとなどしたことはありませんでした。やっぱりありのままに、すなおに何でも神さまとおはなしができたのです。それはすばらしいことではないでしょうか。えー、はずかしいっ、て思うかな。たしかにそうだね。自分が裸だってことが分からないうちはいいのだけれど、わかってしまったら、だんだん^は恥ずかしくなってくるよね。どうしてだろう。とてもすてきに神さまは、わたしたちをつくってくださったのに、そのありのままが恥ずかしいだなんて。それにはね、理由があるんだよ、って聖書は言うのです。

はだかがはずかしい理由

それは、ある日のこと、いまからお話しするひとつの出来事がおこったとき、なんだか心も体も裸でいることが恥ずかしくなってしまったのです。みんなも、きっと聞いたことがあるでしょう。エヴァは^{へび}蛇にさそわれ、アダムはエヴァといっしょになって、神さまがこれだけは食べてはいけないよ、と言われていた木の実をとって、食べてしまったのです。

だめだよ、と言われてたことをしてしまった！　そこでアダムもエヴァも、^{きゅう}急にじぶんが恥ずかしくなってしまうました。なんだか隠れてしまいたい、そんなふう思うのです。なんだか裸がはずかしい、と思うようになりました。ああ、どうしよう。この^は葉っぱでおしりを隠そう。まえもかくそう。そうして、イチジクのおおきな葉っぱをつづりあわせて、こしをおおうものとしたのです。

でももっと恥ずかしかったことは、からだは裸であることよりも、心が裸であることでした。わるいことをしてしまったとき、みんなもできればお父さんお母さんや先生にそれがバレなきゃいいのに、と思うでしょう？ アダムとエヴァは、この日うまれてはじめて、神さまから隠れてしまいたいと思うようになりました。かみさまの風がふいたらよろこんでかみさまのいるところに行っていた二人が、今はそうすることができません。

ひとよ、どこにいるのか

その日も、いつものように風が吹いてきました。神さまがエデンの園^{その}をあるいておられる音がします。いつもならワクワクする心が、今日はドキドキはりさけそうです。ふたりは神さまの顔^{かお}が見えないように、木のあいだに隠れてしまいました。すると、

「どこにいるのか」

神さまが人を呼び始めました。

どれほどドキンとしたことでしょうか、アダムはかみさまから逃げ^にだすことなんてできないことはわかっていたのです。じぶんをよぶ声をきくと、おそるおそる答えました。木のうしろに隠れたままです。

「あなたの足音が園の中に聞こえたので、こわくなってしまい、かくれています。

わたしは裸ですから」。

かみさまには、アダムが隠れたい気もちになり、じぶんの裸が恥ずかしいと^{かんが}考えるようになった理由がすぐにわかりました。

「お前が裸であることを誰^{だれ}が告^つげたのか。取^とって食^たべるなど命^{めい}じた木から食べたのか」

アダムもエヴァも、どれほどドキンとしたことでしょうか。神さまの言うことをきかなかったことがバレちゃった！ どうしたらよいのでしょうか。ゆるされないことをしてしまったのです。ここで、すなおにあやまったらよかったのでしょうか。そうかもしれません。

かみさまはごめんなさいとあやまる^{すなお}素直な気もちをうけいれてくださる方です。

でも、アダムもエヴァも、そうはしませんでした。いや、わたしのせいじゃないんです、と言いわけを始めてしまうのです。

アダムとエヴァのひどい言いわけ

アダムは言いました。

「あなたがわたしと一緒にいなさいと言われたあの女が、くれたから食べてしまったのです」

まるでエヴァのことを考えていない自分勝手^{じぶんかって}なことばです。女の人をつくってアダム

に合わせたかみさまが悪いとでも言っているかのようではありませんか。

すると、エヴァもいいました。

「蛇^{へび}がだましたので、食べてしまったのです」

まるで自分は悪くないと言っているかのような、自分勝手なことばです。

かみさまは、アダムとエヴァと蛇のみなをそれぞれに叱りました。蛇はきらわれ地を這いまわり、エヴァはあかちゃんを産むよろこびの日に、とても苦しまなければならなくなります。アダムは土をたがやして、働かなければたべることができなくなりました。そして何より、みんながいずれはその土のちりになって死んでしまうことが、ここでわかってしまいました。いつか死んでしまうとわかって、その日にむかって一歩一歩すすんでいくことは、けっしてたのしいことではありません。

何ということをしたのか

「ああ、何ということをしたのか」

そう言って悲しむ神さまのことばに、人はどれほど思ったことでしょうか。「ああ、あんなことをしなければよかった」と。けれども、じぶんたちが裸であり、かくれたい気持ちは消えません。かみさまの霊^{れい}のほのおが助けてくださらなければ、ほんとうに土にうもれてしまうばかりです。このままエデンの園^{いつづ}に居続けるなら、もしや神さまを悲しませることをまたくり返すかもしれません。お庭のまんなかにもう一本のこっている生命^{せいめい}の木の実を食べてしまったら大変です。自分も神様^{まちが}のようになる、と間違^{まちが}ったことを考えてしまうかもしれません。

そこで、アダムはエヴァとともにエデンのひがしの門から追い出されてしまいました。なにより辛^{つら}かったのは、神さまと離^{はな}れてくらさなければならなくなったことです。

うたおうアダム、エデンのひがしで

さて、みんなは、聖書の最初にかかれたこのお話を、どのように感じたでしょうか？ アダムとエヴァがしてはいけないことをしたから悪い、神さまが怒^{おこ}ってもしかたのないことだ、と思ったでしょうか。たしかに、そうかもしれません。いや、神さまはきびしいなあ、ちょっとひどいよ、と思ったでしょうか。たしかに、そういう気持ちも残るでしょう。アダムもエヴァも、きっとそういうことを思いめぐらせながら生き、そして死んだのだと思います。アダムとエヴァは、生きていた間、エデンでのすばらしい生活を忘れたことはなかったでしょう。あの空の鳥、水^{みず}辺の魚、地をみたく動物たちといっしょのせいかつ。木の実

はおいしく、水はゆたかで、苦しいことも、死も知らない世界。海も地も、空もよごれてしまった今の世界をやる私たちには、ほんとうに夢ゆめのようなです。アダムとエヴァが、エデンの園を出てからまず始めたこと、それはなんだかわかりますか？それは、神さまにむかって、おいのりをするのでした。そこで、自分たちがしてしまったことを、みとめてあやまり、こころを裸にして、神さまを呼ぶことをはじめたのです。

「かみさま、わたしたちは、かみさまによろこばれないことをくり返してしまう弱いものたちです。あなたが命の息をふーっと吹きかけ、わたしたちの心をもやしてくださらないければ、わたしたちは暗い気持ちで、土のちりのようになってしまいます。どうか、あなたの声をきかせてください。わたしをあなたのもとに立ちかえらせてください。そのために、いま、なにができるか、おしえてください。」そう言って、何が神さまによろこばれることか、ひっしに耳をかたむけはじめたのです。

神さまはわたしたちといっしょに

いっしょにあつまって神さまの声をもとめ、いのる人たちのいる場所ばしょでは、遠くに離れてしまったと思った神さまが、人間のことをけっして忘れてはおられないこと、かならず近くにきてくださることを信じることができます。いつもいのる人たちと、神さまはいつもいっしょにいてくださいます。そのとき、神さまこそ、わたしたち人間のそばにいたい、帰ってきてほしいとかんがえてくださっていることがわかるのです。神さまは、人間がもういちど喜んでご自分といっしょにられる、心地よくって楽しいお庭に返してあげたいと、願っておられます。私たちはその日をまちのぞんで祈り、うたいたいと思うのです。また、動物たちや植物たちも、人間といっしょに待っています。また世界がもとどおりになって、神さまと人が愛し合い、人と人が愛し合い、世界のすべてのものが喜ぶことのできる日を、みんな、まっているのです。そのときには、みんなでいっしょに、すーっと深呼吸をしたらここちよいでしょうね。きっと、かみさまの息を胸いっぱいを感じたら、お腹から力をこめて歌いたくなるのではないかな。礼拝の讚美歌も、エデンの園のかみさまに届くように歌いたたいとおもいます。さあ、いっしょに神さまにむかって、讚美の歌をうたいましょう。

大人の説教「うめきをともに～肉体と霊と言葉の一致」

パウロは、ローマの信徒への手紙8章18節以下で、被造世界の苦しみ悲しみを嘆き、こう言っています。「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています」と。この「共にうめく」というのは、これはパウロ自身を含めて共に苦しんでいるということを意味しているのでしょう。このあとで、「被造物だけでなく、『霊』の初穂

をいただいているわたしたちも、……心の中でうめきながら待ち望んでいます」とあります。

うめきというのは、本来言葉にならない言葉であると思います。わたしたち人間は、たとえば身近な人の死にさいして、不慮の事故に直面した人を前にして、自らの負いがたい不幸や苦しみのただ中で、あるいは産みの苦しみのような大きな痛みを被るときに、言葉にならない言葉、うめき声を上げるのです。葬儀の席で、遺族にかける言葉も見つからないような悲しい死というものに向き合わなければならないことは、しばしば経験することです。心からの言葉でなければ、そこでかけるごによごによとした「お悔やみ」の決まり文句は、落語の種にはなっても本当の意味で深い慰めの言葉となることはありません。そのときに真実な精一杯の姿は、共に苦しみを味わうということの中でうめくことでしかないということでしょう。あるいは「ああ」と声の涙を流すことしかできない状況を共にするということでしょう。そのような声にならない声を、自分と共にあげている被造物がいるのだ、いや、全被造物がみなそのような言葉にならぬ言葉をはしているではないか、そのことをパウロは知っているというのです。

「知っている」という言葉は、さらりと読んでしまいましたが、この文脈では、驚くべき言葉です。というのも、このうめきの響く現状にあって、一方でパウロは苦しみながらも心開いて耳を傾けることができているということであり、苦しみを担うものたちが、自分だけではなく、たしかに共に世界に存在することを確認することができるということだからです。ここで知っていると言われますが、問題とされている知識は、学識といわれるような知識や、いわゆる知識人のもっているそれではないことは明らかです。むしろ、そのような本の埃にまみれていることを誇るような知識は、人の苦しみに耳を傾けるような心をかえって鈍くさせることさえあるでしょう。善悪の知識の木の実から取って食べたアダムとエヴァは、多くのことを知るものとされました。その子ら、また子らは、人間の死について知り、人の愚かさを知り、その愚かしさや狂おしさ、哀しみ痛みの原因さえ追究することすらできるものとなったのです。この知恵をもって探究できることがらの幅広さ、奥深さ、細やかさは大変なもので、それはあらゆる事柄について解説する書物がこの地上にあふれ、さまざまな事件や出来事に人々がどのような知見を働かせてこれに批評を加えているかの姿を見るならば、よくわかることです。しかし、そのような批評や評論や解説が、共にうめく心を欠いたものに終わってしまっていることが、いかに多いことでしょうか。主イエスがファリサイ派の卓越した知識を最も厳しく責められたのは、その点においてでありました。主イエスがこの地上でもっとも悲しまれたことは、共にうめくことを忘れた信仰の知識人たちが、ユダヤ社会の指導者となり、あれこれ教えを垂れ、共同体論を論じ、政治を動かし、人の上にたって裁きのつとめを行使しているということであったのです。そのファリサイ派の知識人であったパウロが、ここでは、しかし、「わたしたちは知っている」と言って、まったく新しい知識について語り始めるのです。そして、自分の耳が、今まで聞いたことのない苦しみを、聴き取り始めていることに気が付きはじめている、と真底からの、ほんとうの発見の喜びに似た熱い心で語り始めているのです。彼は、自分の心もまた柔らかに、そのうめきを共にしはじめていることにも気づき始めています。そしてそれが、キリストを知る新しい知識によることである。キリストと共に歩むことを知ったから、その

ような知が自分を変えたから、わたしの目は耳は広く開かれ、全被造物を再び視野におき、その声に耳を傾けることさえできるのだ、というのです。アダムとエヴァが善悪の知識の木の実をたべたときにも、目が開かれたという表現がありました。そこから知ったことは自らの裸であり、恥であり、罪であり、うめきに満ちた今後の歩みでありました。いまやパウロは、そのときと同じほどの決定的なありようで、自分がこんどはキリストを知る知識の木の実を食べたものとして、新たなうめき声を聞くのです。しかしそれは、自らを覆い、恥を代わりに追って、罪に勝利されたキリストと共なるもののうめきであるという点で、死ではなく、命に係わる決定的に新しいことがらでした。

ですから、そういううめきを共にするものは、何もしえずに、ただ呻いているだけではありません。15節にありますように、そのただ中で、うめきの中で「アッバ、父よ」と祈りの言葉を絞り出すことが許されていることをもまた、彼は知っているのです。「アッバ、父よ」と呼ばわり求めるこの神は、ただわたしひとりの父ではない、あなたは妻の父でもあり、兄弟姉妹の父でもあり、ここにいるすべての者の父、そして全被造物、世界の父でもあられる方です、という叫びです。

しかも26節では、わたしたちだけではなく、神ご自身に他ならない霊が、わたしたちのそのうめきを共有して、おそらくは再びわたしたちの鼻に吹き入れられ、喉をとおって胸をみたし、血となり肉となり新しい命を形成しながら、わたしたちのために執り成してくださっていると、パウロは言い切るのです。「うめく」というのは、言葉にならない、ということであることは事実です。しかし、まさにそのときに、言葉をうしなつたわたしたちを、愚かな者だと見下され、叱りとばして追放して、放っておいておしまいだ、というのではなく、むしろその現実を、神ご自身が言葉を失ったかのように「ああ、なんということをしたのだ」と、うめきを共にしながら、切なるうめきをもって、楽園の外の道のりに伴っておられたのだということです。

パウロはここで、「苦難」「苦しみ」について語ります。「苦しみ」という言葉が聖書に書き記されたとき、その意味は、わたしたちのこの国・社会で味わう苦しみというものと同じであったかどうか、それは一概に言うことができないものです。わたしは戦後をしらない子どもたちの一人として育ちましたから、わたしが戦中・戦後の苦しみと同じ意味で苦しみという言葉を使いすることはできないかもしれません。ここにいるだれもが、パウロの時代の殉教とか迫害という文脈で用いられたこの言葉とまったく同じ意味でこれを理解することができるわけでもないでしょう。たとえば、おなじように、この世界のうめきというときにも、震災前と震災後では意味がかわって響いてくることも一面事実です。核の脅威におびえる近・現代そして今日の世界のうめき、それは全被造物のうめきであることをわたしたちはまず知識として、知ってしまいました。日本と外国のうめきにもさまざまな局面と内容があることも感じています。

しかし、あらゆる時代の真実なキリスト者がそうであったように、今日まことに主と共に生きようと願う魂は、パウロの言葉に深い所で共感するのです。さまざまな言葉がとびかい、批評、論評、議論、対論、シュプリヒコールにプロパガンダと言葉はあふれているが、苦しむ者と共にうめく声

は多くはない。しかし、たしかに、全被造物は、そして神の霊は、うめきの声をあげ、祈りをささげていることをわたしたちは知っている、と。

20節に、「被造物が虚無に服しています」とあります。「被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意思によるものではなく、服従させた方の意思によるものであり」。この「虚無」という言葉からコヘレトの言葉を思い出す人もあるかもしれません。「空の空なるかな」「なんとむなしいことか、すべてはむなしい」と。コヘレトの言葉、かつては伝道の書とも呼ばれていましたが、これは、「知恵の書」とも呼ばれてきました。まことの知恵ある目には、世界に見せかけの現実があることが見えてきます。見せかけは美しく見え、賢く見え、豊かに見えながら、内容がどんなに貧弱かということ、どんなに愚かであるかということ、そういう意味をもっているのが、「空しさ」「虚無」という言葉です。知恵あるものは、見せかけの賢さ、豊かさ、美しさの奥に隠されている本当のところを裸にしてしまいます。わたしたちの本質であるアダムの恥を、木の間にかくそうとしても、それを探し求めて見出してしまうのです。そのうえで、その人の中身が弱く、欠けており、愚かで、あるいは苦しみにみち、貧しさに飢えている姿をうけ、「ああ、むなしい」と共にうめきつつ、これを共に負っていくのです。「虚無」ということば「むなしい」という声、この場合にそこにあるのは、無常観というものでは決してなく、苦しむものと共に苦しむ切なる思いであると言えるでしょう。パウロはそのような「思い」を世界全体の姿に見ているというのです。

19節にこうあります、被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます」と。被造物は、そう、「切なる思いで待ち望んでいる」のです。この「切なる思い」という言葉は、パウロにも珍しい言葉です。ギリシア語のもともとは「からだをずっと伸ばす」という意味だそうです。ある先生が面白い表現で解説してくれていました。つまり、小さな子供が、何かにさえぎられているその向こうから、自分の父親が帰ってくる、何とかして見たいと思い、背伸びをしてみる。母親に「だっこだっこ」とせがんで高くなろうとする、そういう姿を思い浮かべて良い言葉なのだということです。あるいは、またある人は、ここに用いられているからだというのは、人間のことであるよりは、むしろ、動物のからだであるといいます。たとえば、ある人に可愛がられている犬がいる。飼い主がいない。そこで、人間などは聞きつけられないような小さな足音をいきとり、あるいはそうした匂いをかぎとると、突然立ち上がって、耳をピンと立て、しっぽをふって、そして前足を挙げて体を伸ばして飼い主があらわれるところを待ち構えている、そんな姿を示しているというのです。被造物はそういう姿勢で待っている、そのすがたをわたしは今や知っている、とパウロは言うのです。そしてこの被造物とともに、パウロもまた、敏感に本当の救いをかぎつけて、待ち焦がれているのだということでもあります。

では、被造物は何を待ち望んでいるのでしょうか。ここに、まことに驚くべき表現が出てきます。「神の子たちの出現を」というのです。「神の子」ではありません。「神の子」ならば、わたしたちキリスト者もすぐにああ主イエスのことだと、イエスさまが来られることを待ち望む、救い主の到来あるいは再来の希望のことだとすぐに考えることができたでしょう。しかし、違うのです。「神

の子たち」です。しかもここでは、わたしたちが神の子であるということを12節以下からパウロがすでに語ってきたその文脈でこう言われているのです。

「出現」という言葉がつかわれていますが、わたしたちがいよいよ開かれた舞台に立つとか、この地に目立った働きをするという意味ではありません。これはむしろ「覆いが取られる」という意味です。いわば「裸」になるといった方が近いでしょうか。今まで、正体を隠していた覆いがずっと取られる。その意味では、神の子たちの正体が、包む隠さぬその裸の心と体が現れるのだと言ってもよいと思います。23節に「からだのあがなわれること」という言葉があります。わたしたちが、からだまであがなわれて、よみがえりの主イエス・キリストと似た姿となることだとこれまで説明されてきた事柄です。つまり、わたしたちが救われる、わたしたちの救いが完成するということです。なんとわたしたちの救いの完成を、被造物もまた、身をのばして今か今かと待ち望んでいるのです。なぜかというと、そこにこそ、被造物全体の世界の望みがあるからです。わたしたちが被造物に救いをもたらすからではありません。わたしたちを、そのように救った神の救いが、すべてのものの救いになるからです。21節のところにありますように、「被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子どもたちの栄光に輝く自由にあずかれるからです」。これまでパウロが何度も語ってきたように、ここにも、なわめ、奴隷の状態から、神の子の自由にうつしかえられていく被造物すべての者の姿が描かれます。わたしたちはそれに先立って、被造物全体のすくいおしるしとなるのです。テモテへの手紙1章でパウロが書いたように、それは、わたしたちが偉かったからではありません。わたしたちが「罪びとのかしら」であったから、神が一番に救ってくださったのであります。もっとも弱い声でも、「アッパ父よ」とよびうるのだと、わたしたちを世の望みのしるしとして立ててくださったのです。それゆえに、わたしたちが、人々の苦しみのただ中であって、なお生きうる意味は、わたしたちの言葉の強さや、わたしたちの言葉の豊かさではなく、わたしたちの存在をそのように生かしている神の霊の炎の力、その愛の風、御霊なる神そのものであるとすることができるのです。わたしたち土の塵にすぎないアダムの子は、人間のために、人間と共にあらゆる苦しみを担うめき十字架にかかれた主キリスト・イエスとむすばれ、その霊を吹きつけられ、復活の主とともに新しい命にむすばれました。さあ、新しいエデンの創造の御業を待ち望み、祈りましょう。被造物とともに、裸になって、神を父と呼ぶことのできる御国の前味を味わうのです。わたしたちは礼拝をまもります。そこでは罪の姿が裸にされ、そして赦され、あたらしいキリストの体に与るものの希望が覆いを取り除かれた神の似姿として光輝くのです。そこには神と人とが愛し合い、信頼し合い、人と人とが愛をもって仕え合い、また被造物とともに実りを分かち合う生き方が待っています。わたしたちの世は、わたしたちの生活のひとつひとつのありようからも、その新しいエデンの生活のしるしを、見たいと切なる思いで待っています。そして何より天の楽園で、父なる神、子なる神が、御霊の声に耳を傾けながら、今か今かと待っておられるのです。主はさがしておられます。「どこにいるのか」。わたしたちはもはや隠れさる必要はありません。わたしたちの新しい命の裸に恥ずかしいところなどありません。「はい、主よ、わたしはここにいます、主イエス・キリストの御名のゆえに」と喜んで応じたいと思います。